
羽ばたくのは

全力疾走

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽ばたくのは

【Nコード】

N6737B

【作者名】

全力疾走

【あらすじ】

なんか、真夜中に烏がうるさいなーって思ってたらいきなり、家に入ってきて、一緒酒のんでさわいでんだ……。な？意味が分からないだろ？俺あしたから…高3なんだけど…by哀れな男

夢オチ

夜か？……いや、まあ夜か…深夜3…45

鳥が鳴いてる、どうなっちまったんだ、都会は？
アイツら鳥目だろ？

こんな事を考えてしまうくらいに……

寝れねー

今日、昼まで寝てたからだ

『カーカー』

『アーアーアー』

それに比べ………鳥は元気だなー、生け取りにして焼き鳥にし
ちやおうかな♪

…………そういや昔、空を飛べる鳥が羨ましくて、鳥になりた
いと心底願ってた5才児がいたな。

そいつは親に

「鳥になりたい！」と言った

親がとる行動はただひとつ――――――“高い高い”
まあ良かったんだけどね。
楽しかったしさ。

幸せだったしな…

例え掴まれて持ちあげられただけでも、飛んだ気になれたんだから…
そんな純粋な子が13年もすると、鳥みたいに真っ黒になっちゃう
のが、都会の神秘ってやつだね。

そういや、“鳥になりたい”とか最近思いもしなかったな…
……これが老いるって事か。

『カチャン…！』

なんだよ、ベランダから異質な金属(?)音……ここは、団地の3
階。

ハッ…そういう事か…いい度胸だな。泥棒の分際で、この俺の思い
出を打ち消すとはよ……

家には木刀が5本もあるんだ
…いくしかねえだろうが!!

木刀を両手に持ち二刀流！
カーテンを開けて窓を開ける、…木刀を振り上げる。狙いを定め…
……………？

狙いは烏？

「…あーあ…：…なんだよ、烏かよ…：あっちいけ！シツシツ…」
もう一本の木刀を脅しで振り上げる

…つまりは、この時万歳の格好になってるわけで
まさか烏が部屋に飛び込んで来るとは思ってた無いわけで
木刀は零距离勝負にはあまりにも不利なわけで

侵入者！侵入者！侵入者！
緊急事態！緊急事態！
やばいぞ！

あいつなんの病気持ってもおかしくねええエエエ！！

『騒ぐな！！』

「うるせえー！！！！！！！！」

『…え？、え？ちょ——…！！？』

両手をクロスし、左手は右から右手は左から、そして…踏み込みと
同時に切り込む。
一番破壊力が出せる技だ。

《ギャンツ……！！》

鳥の体到的中…鳥は変な方を向きながら落下。

「……仕留めた。」

……が部屋に鳥の死体はきつい、と今さら気付く

「何か会話した気がするが……まあいいや。それより、ヤバいな、何かの保菌者だったらどうしよう………」

取りあえず、鳥を木刀でつつき、生死確認
当然、動かない。

「さて、と…」

木刀で鳥をハサミ、いざ夜の闇へ…

『待てコラアアアアア！！！！！！！』

鳥がクチバシを鳴らした。

頭が一瞬止まる、そして考え出す。

・コイツは死んだはず

・蘇る

・スゴイ

・貴重

・しゃべってる

・+100の価値

………結果。確保！！！！

判断が決まる。腕を伸ばし掴みかかる

『……ガキが!!』

鳥がその黒い羽を羽ばたかせ、風を飛ばす。

「……え……?」

気付くと、窓は部屋の端に……いや……俺が端に来たんだ。

飛ばされたのか?

《ドンッ!!》

身体が打ち付けられる……

「ガハッ!?、ゲホ……ハ……ハ」

肺が一瞬、止まりやがった。

「テメエ……、ハ……、な……だよ?」

……声にならない

『見ての通り、ただの鳥だ。なんだ、息も出来ないか?』

……待てよ、世の中、いくら鳥が頭良いからって喋るのは許されねえ
だろ?

……しかも今、俺馬鹿にされた??

「ザ……ンナ!」

『は?なんだ?聞こえ無いぞ?』

「ザケンナ!!!!」

木刀を持ち一刀流――一撃でしとめてやる……！――

『辞めろ、馬鹿が…』

《ガン……カン……カラン》

「なッ!？」

足下に転がってきたのは、木刀の切っ先

一瞬あいつに触れた、ただそれだけで、砕けやがった……

「マジかよ……」

『マジだ、決して夢じゃねえよ』

……じゃあ、俺はどうなるってんだ？

夢落ちならともかく、このままだと最悪なんか、殺されそうな展開もありそうだし

……最高でも精神科行きは免れねえじゃん

その時、鳥がニヤケた。

『大丈夫さ、お前は普通だ、まだな。ただ俺が少し特別なだけさ…』

「なっ!？」

『お前が初めてじゃないんでね、反応は読めんだ…』

なんだコイツは……こんな、ちっこい黒い鳥のくせに……

『あ、あと安心しろ…殺しはしない……そうだな、シラフで話すのも疲れるし、酒持ってこい。』

「は？」

待て待て待て、なんだコレ!?

……落ち着けー俺

……確かに、俺も現実逃避ができるならしたいさ

だけど烏と一緒に酒飲むって、なんか、逃避とかじゃなくて、もう脱出じゃない!?

言い換えれば、〈不思議の国の住人許可証〉発行みたいな。

『あ、ツマミは生ゴミでもなんでもいいから、ほら、オレラは、地球に優しいし…オマエラみたいにゴミださねえし』

そこだけリアル設定!!?

え?何?? しかもコイツさりげなく今、全人類見下しやがりましたよ

俺が色々と考えているといい加減烏がキレ気味に

『……早くしろや、………いつでもバラまけるんだぜ?』
脅してきた……

「あの、何を？」

イヤな汗が背中を流れる…

…アイツは真顔(多分)でクチバシを開いた

『……細菌兵器』

………やっぱりか

———10分後

『最近ゴミの日まで覚えてきてさー
それによーもうトラップとか防止とかあんなのは、生まれすぐに突
破の仕方教えるからさー…』

「頭良いですもんね。」

『まあな、頭といえは……何か、カツラかぶってる奴いるじゃん？
あいつらバレてねえつもりかもしれないが、もうバレバレ。
…だからいつも巢に近付いたら見せしめに、カツラの奴だけ集中攻
撃よ…もちろんカツラとるだけだけどなー』
はい、完全に出来上がっております

しかも俺が接待の役です
頼む…どうかこれが夢であれ…！！

ったく、これじゃあラチあかねえな…
一体、何しに来たんだコイツ？
下手な理由だったら、酔わせて捨てよう…
細菌撒かれる前に…

———この時、俺は思いもしなかったんだ

「あの、一体何しにきたんですか？」
まさかコイツとの出会いで、俺の人生が変わるなんて

『ああ、そういや言って無かったな…
俺は、お前の願いを一つだけ叶えてやりに来た…』

考えもしなかったんだ———「そうか…なんかトコトンメルヘン
街道直進するんだな……」

『馬鹿が…メルヘンはハッピーエンドしかないが、俺はそんなに甘
く無いぜ！！！』

「じゃあ、却下の方針で、そしてもう帰ってください。
まだ夢落ち間に合います。」

『まあ、大丈夫だって…取りあえず話してみろよ、なんかあるだろ？
こう…、人前で話せないような、なんか嫌な感情を煮つめて、固め
たみたいなの、奴？』

「うーわー…本当にメルヘンじゃねえー！」

……と、言われてもな…なんかあるか？
人前で話せないような？？

……………あつた。

「あの、じゃあ彼女欲しいです」

『却下』

「えー！？何その選択肢!？」

『まず、それはお前の努力でなんともなる。それに人前で普通に話せる。』

「……そんなもん自分でなんとかしろ!!」

「ぐっ……何も言えねえ……」

『なんかさーあんだろ？ウルトラマンになりたいです。とか、ショッカーになりたいです。とか………鳥になりたいです。とか?』

「えっ?」

『いいか？俺はランプの精でも、七つ集めると呼びだせるドラゴンでもねえ……叶えてやるのは一生努力してもかなわない、そんな奴さ。』

「一生……叶わない?」

『そうさ、なろうと思えば、独裁者にだって思考と努力でなれる……でも巨人にはなれない、鳥には……なれないんだよ。それくらい分かるだろ?』

つまり、努力の外にある願いを叶えてやるのが俺の仕事なわけよ?』

「……なりえない物になる、やっぱりこれは夢落ち向けだな……」

『だが、夢じゃねえ……願え。お前は何を望む?』

……信じてなんかはいない、きっとコイツは俺が頭ん中に作り出した、産物……直ぐに目覚めていなくなる……

なら、言ったっていいじゃないか…

願ったっていいじゃないか…

「俺は…鳥になりたい。」

『承知、また会おう、俺の兄弟候補さん……』

チチチチチチチチ…カチャン

ほら、やっぱり夢落ちだ。

「はぁー、明日から学校か…面倒くせー」

明日から高校3年生が始まる

嫌な年になりそうだな…こんな夢からはじまんだったら

あ、その前にビデオショップにビデオ返さなきゃ……

さて……朝の支度を整え準備完了！

いざ向かうはビデオショップ！

外はポカポカ陽気…

いやー…春だねー

気持ちいいなーオイ。

さて……………

こんな日は静かな時間が流れるのが何よりの平和なんだろうが……

なんだ？

この、不調和な機械音は？？

あ、なんだよ

「ピーポー…ピーポー騒ぎやがって」

しかも、チカチカ光りやがって…

ムカつくなー

なのに何故足がそっちへ向かうのか？

人間って嫌な生き物だな…

パトカーに救急車

にぎやかだな……

その中心にいるのは……………

「だーかーらー、急に後ろから押されて、バックとられたの！！分かる！後ろから！つまり……犯人の顔なんて見れ無かったわけ……あーもーアレに財布とか色々入ってて……もーうー刑事さん……何とかしてよ！？」

救急車は大丈夫ですから……ハイ、すみません……」

……………女の子？？？

なんだ、引ったくりか……

いいや、行こう。

あーあ、せっかくの気分が台無しだ…
どうしてくれんだ、この野郎…

この同じ空の下の何処かにいる、ひったくり野郎に思いをはせる……

あーあ、いいやビデオショップに行こ。

そして、今日1日を楽しもう……

商店街を抜けてくか……近いし。

まだ、午前中だし、商店街に光りが差し込んできれいだしな…

人もマバラだしなー

………さて…問題です

人がマバラでかつ、明るい

そんな中で、一人汗だくで走り……

黒い服で目深く帽子を被り、顔を隠した男を…

貴方はどう思いますか??

そして、ココに暇人が一人……ビデオを持って立っています…

そしてこの人は好奇心強めです

……………勿論、尾行するしかないじゃないですか？

おっと、なんか捨てようとしてんな、あいつ……
財布かな？

あ、捨てた……………

拾ってみますか

白いかさばる大きさの財布だった……………金が入って無い。
レンタルショップのカードに、身分証明書、

……………ああ、やっぱり。

これあいつのじゃねえな…

身分書の写真から判明

アレ？アイツ……………いなくなっちゃった。

ま、いいや。後で交番に行くとして、先ビデオ返さなきゃ…

拾った財布をポケットに入れて歩き出す
目指すはビデオショップ！

—————さっきも言ったが……………今日はいい天気だ。

なんか自然と鼻歌まで出てくる…それぐらいいい天気だ

しばらく歩いていると入った事ない喫茶店があった

今は11時か…

ちょっとコーヒーでも飲んでいくか…

やはり気分は人を活発にさせるね。

店内は静かで、優しい感じで、明るかった

さらに、癒し系な曲が流れ…いい感じだ

店の名前は…【夢屋】

今度もココにきたいと思う店だ

取りあえず、一番奥の席が空いているからそこへ

店員さんに一番安いコーヒーを注文

のほほんと時を過ごす

なんか本持ってくれば良かったな…と考えはじめる。

あ………：そういや、財布拾ったんだ…

中に身分証明書があったし、連絡でも入れてあげるかな…財布をポケットから出し。

身分証明書を探す…

「……コーヒーです。以上でよろしいでしょうか？」

無愛想な店員さんがコーヒーを持ってきてくれた

「ハイ、大丈夫です。」

目も合わさずに返事だけ返す

身分証明書は…あった。

あちゃー……電話番号書いてねえー

「使えねえー…」

《ガンッ!!》

「いたッ」

「あつ、すみません」

さっきの無愛想な店員に蹴られた

しかもかなり怒ってた。

……………あ、

「使えねー」を勘違いしてくれたのかな……

スネを蹴ってくんだもん、きっとそうだな。くそ…女の子だから、
なにも言えねえー

しかも俺が悪いっばいな……………

まあいいや。

ゆっくりしてこう

痛みが引くまで…いや、その3倍くらいはゆっくりしていこう

「ねっねっ……—……—……—」

「うん。——さい……—」

「…当に!？」

なんだ、店のカウンターの方が騒がしいな……

静かな店だけに、小声も結構聞こえんな……

うーん、少し眠くなってきちゃった……

少し昼寝するか……5分くらい……

『おい』

「?????」

『時間が無い…手短に話す……早くそこから逃げろ!』

「お前は誰だ? 何だココは? 真っ暗でなにも見えねえ……」

『話しは後だ……いいから、早く……』

へう……う……う……う……

「何だ？この音？」

『ちッ……間に合わねえ……』

………

何だ……夢かよ。

また変な声が聞こえたけど……

何だ……なんか店内が少し色が変わった？

いや……赤く点滅？？

………あつ、パトカーが店の前に一台止まってんのか……

………な！？！

何かあったのか？

さっき何かカウンターの人が騒がしかったけど……

あ……店内にあれ……警察だな……

店員さんの接し方が少し変だ。

あ……なんかこっち指さしたな……

うん？、警察と思わしき人がこっちに来るな……

「君…ちょっと、来てくれないかな？」

何言ってるの、この刑事さん？

「えっ？何処にですか？？」

「いやいやいや、分かるだろ？ダメだよー人の物とっちゃあ？」
「ヤベ…コイツ、言葉はなめくさってるけど、すげえ殺気みたいなのが漂ってる……」

「あの…言ってる意味がまいち…」

「この財布君のじゃないね？」

「ええ…そうですけど？」

「ずいぶん正直な奴だな………ひったくりのくせにな！！」

「え？ひったくり？」

「ああ、この財布ひったくったバックの中に入ってたやつだろ？」

「いや……コレはさっき、なんかいかにも怪しいげな黒い男が捨てた奴を拾って………」

「その言い訳の方が怪しいつーのに気付かんのかい？」

「いや……俺が取ったって証拠は？」

くそヤケだ…この野郎……！！

「いやいや…君面白い子だな…今、目の前に物証があるだろ？君の手の中に？」

「い、や…ちょっと待って下さい。本当に取っちゃいないですよ。」

拾ったんですって！」ヤバイこの展開はヤバイぞー。

「いいかげんにしたら？私のバック取っておいて……？」

「いやだからバックなんて知らな……」

待て……今、俺は誰としゃべってんだ……？

「あの……貴方は？」聞いてみよう。

「あんたでしょ？今朝私のバック取った奴？」

今朝？私の？バック？

その瞬間記憶がフラッシュバック！！

あの時、パトカーや救急車の中心にいた女の子の顔が思い出されて……今日の前にいる奴の顔と重なる

あれ……一緒に顔してる……そして、さっきの無愛想なウェイトレスと同一人物だな、声が同じだ

って、えー……

何この状況、今朝見た被害者に今また再会して、こんどは傍観者^{ヤジウマ}から冤罪被害者に……

世の中本当に狭いな……

待てよ

でも、他人のそら似って事もあるんじゃないか……

「あの…ひょっとして、今朝…警察には押しがつよくて…救急隊員には腰が低かった、人ですか？」

「あんた…あの時いたの!？」

よし…いいぞーなんか誤解が解ける突破口が見えた――

「やっぱりお前か、あのな――これ犯罪者の特徴なんだがな…犯人は現場に戻ってくるんだよ…」

気がしたんだ――

「なんすか、その一昔前の法則は!？しかも、それ結構、犯罪の分野によるじゃないですか!？」

本当にめっちゃくちゃだ…なんだ「やっぱりか…」って目しやがって…!

「私もこの刑事さんと同じ意見よ。

やっぱりあなたね…」

こいつもか――!!!!!!

「それに刑事さん、この人さっき私の財布の中見て、お金が入っていないのに気付いて、『使えねー』とかいいましたよ!!」

……………なるほど、それでスネを狙ったわけか…

ヤバイ……俺の行動すべて犯人につながる…説明しねえと…

「そ、それは身分……」

「君には黙秘権がある…これから言うことは裁判での証拠になる」

裁判沙汰に――！！？

――30分後――

「君まだ未成年か？うん？大丈夫だ…正直に言って謝れば、大事にならないから……」

取り調べ室にいる俺がいた。

「あの刑事さん、俺本当にやってな……」

《バンツ！！》

お願いだから机をおもいつきりたたかないで――！！！！

「いいかげんにしろ！！！何処に『あ、アイツ怪しいな…』って思
ってついていく馬鹿がいるんだ！？」

「ココにいま…」

「まだ言うか！！！！」

ヤベーーマジコエーーー

なんか認めたくなっちゃうよー

いや待てよ…

俺は踏み絵でもさせられない限り認めんぞー
戦い抜いてやる！！

《ガチャンツ……》

取り調べ室のドアが開く…

「あの…村上さん…」

この野郎の名前は村上か…覚えておこう…

「……………」

「マジか!?!……………」

何、話してんだろ…

「あー、言いにくいな…」

「いやでも、もうかえしてあげないと…」

「分かった」

二人の刑事の話が終わった

そして一人が出ていく

また村上と二人っきりだ……

はーへ二人っきり✓って文字面はいいんだけどねー

この言葉もTPOが大事だな……

「君…名前は…たしかー」

「三河 悠佑です」

「そうか…三河君……………もう変な人について行っちゃあダメだぞー」

……………え？

「今、あるひったくり犯が捕まった…：ソイツが今朝のもやったと供述したんだ…つまり君は冤罪だったんだよ…：いやー…：…：ドンマイ！」

ドンマイじゃねえー…！…！…！

「よし、君は釈放。帰ってよし。あ、あと犯人がこの携帯持っててな、多分さっきの喫茶店の子のだ。

……………返しておいて。」

……………ええ？

「…と言いますと？また会いにいくと？」

「大丈夫…もう連絡は入れておいた」

「そういう問題じゃ…」

「いいか…男は度胸だ!!」

「そういう関係じゃ…」

「大丈夫だ、きっと、いい関係になれるって」

「…そうじゃねえー!!!!!!!!!!」

—————10分後

俺は【夢屋】の前にいた。

なんて態度で会えばいいか…

俺は悪くないのに…

取りあえず会って返して、すぐ帰ろう

勇気を出して一歩踏み出す

《カラン…カラン…》

鐘が俺が店に入ったのを告げる……

カウンターのウェイトレスに……

「あ……」

「あ……」

ああ、いきなりか…

「アンタ、私をどうしに来たのー！ー！？」

ウェイトレスが叫ぶ

「ちょっと待てー！ーその反応はねえだろ！ー！？」

こんな態度かよ……

「取りあえず落ち着け、別に何もしないから、な？」

「いや、アナタは私を恨んで……何？身体狙い！？」

こんのケダモノ……！」

何を先走った？

このアマは？

おいおい…店内の視線が痛いよ

「な、なあ…村上…いや刑事からなんて聞してる？」

「え？警察からは：《あーもしもし、なんかアイツ違った、うん冤罪、だから釈放ね。で：そっち向かうから、仲直りしてよ。》って」

村上――――！！！！！！

なんか俺が仕返しに行く見たいなそんな言い方じゃねえか！！

「あの……まあ別にもう怒ってないから……」

「ウソ！！」

え――……

「あの、じゃあ何かおごって下さい。」

「……………それで許してくれるの？」

「はい、それで手を打ちましょう。」

「じゃあ後少しで仕事終わるから、待ってて。」

え？この雰囲気の中待てと？

あの子……天然？

なげえ…5分ってこんなに長かったか？
カップヌードルの待ち時間よりなげえ……

「お待たせー」

やつと来た……

「何が食べたい？」

さて、ここでなんていうかで男が試されるわけで……

「おい…坊主、ここで食ってけ…な？安くしてやるから…いいよな
！？」

………厨房から罵声が……

「あっ…じゃあココにしようか？」

「ハイ…」

また一番奥の席を陣取る

すぐにウェイトレスがきて注文を聞く。

「私はケーキとコーヒーで」

「うん、分かった。他は？」

あ…やっぱり同じ職場だけあってフレンドリーだな。

「俺は…」

「コーヒーだけね、以上で？」

なるほど同胞の敵は自分の敵って訳か……

「いや…俺は…」

「坊主ー！……！！！！コーヒーでいいんだな！！？」

「……ハイ」

今度はカウンターから同じ罵声が……

さて…話すつもりは無かったからなんて話せばいいんだ？

すごくやな空気が流れる……

「あの…今日は本当にごめん。まさか人違いだとは思わなくて」

先に出たのは彼女だった

「あ、いや俺も行動が紛らわしかったし…」

「まあね、人の財布をチェックはどうかと思うよ？」

「ハイ…すみません」

結局、怒られんのおれかよ…

「でも、あれは電話を入れようと電話番号探してた訳で、けして物色してたわけじゃ……」

「でも、見たでしょ？」

「ハイ……」

「まあ……いいけど見られて恥ずかしいもんはいれてないし……」

「お金も無かったしね」

《ガンッ!》

ちよっ……またスネが……まじで、もうスネは蹴らないで……

「何痛がってんの？男でしょ？」
な、なんて理不尽な……

「いや……なん発もくらってりゃこうなる……」

「まあいいや……一応私の名前教えておくね……綾野^{あやの} 綾香^{あやか}ね、よろしく。」

……この名前を聞けば……みんな考える事は一つだろう……

「あの……どっちが名前？」

《ゴッ!》

「スネがー!」

夢才チ（後書き）

後書き………第一話から書く事は………あの誤字とか分が稚拙で
ごめんなさい

シガラミ

綾野と適当に話しをして時間を潰し

綾野が大学1年だと分かった

「何だ私の方が年上じゃん。アンタ顔は老けてんのに、性格ガキっぽいもんねー…」

「顔はどうでもいいじゃないですか……」

それに俺も高3なんですが…」

「そういえば…名前何？」

あ…まだ名乗って無かった…

「三河です。」

「おーけー、三河君一体アナタは何故ココに戻って来たのですか？」

村上传えて無かったのか……？

「あの、これ、アナタの携帯ですよね？」

村上から預かっていた携帯を渡す。

「……………いや、違うよ？」

綾野が答える

「え？…だってひったくりが持ってたっ…」

村上が言ってたな…

『ひったくりで捕まえたら、綾野のも認めた』…って事は、他にも盗んでるはず…少なくとも二回は盗んでる…

じゃあこれは、二人目のって事か…

「確かに…コレ女の子ポイ携帯だけど、私のじゃ無いな…」

綾野がキーホルダーでゴテゴテになった携帯（もはや、携帯の大きさでは無い）を出して言った…

「私のだったらココにあるし…」

なるほど、この誰だか分からない携帯の方が多分…性格がいいな

「面倒だけど村上に届けろって言われたしな…、電話してみて、届けるかな。」

「そうだね…、じゃあ、また今度暇つぶしにでも、遊びにきな。次はちゃんと客として扱ってあげるから」

「……ハイ」

綾野と別れ店を出て。この身元不明な携帯の履歴から電話をかける
《家》と書いてあるんだからコノ番号であってるはずだ。

ただ、この人の携帯、ずっと圏外だな……

止められてんのか？

仕方ない、俺ので、かけるか…

《トゥルルルル…トゥルルルル…トゥル》

《ハイ、もしもし？》

「あ、私…携帯を拾った者で…」

《携帯？》

「ええ、なんというか……、ひったくりが持っていたみたいで。」

《ひったくり……？》

なんか変だな……

「あの…この携帯って女の子のですね？」

《……え？、もしかして、それ……》

何だ、何かあんのかよ？

《あの、その携帯の最終履歴っていつですか？》

「最終……は、12月28日ですね。」

今は、もう3月の終わりだから……結構、止められてんな……

《………やっぱり……それ娘のです。》

「ああ、やっぱり娘さんですか……」

《ええ、去年の終わりに亡くなった……》

「え？」

ちよっと待て……亡くなった？

なんで……ひったくられてんだ？

《多分……ひったくられたのは、主人です》「旦那さん……？」

《ええ……、娘が去年亡くなった時に、………その、形見分けで、それは主人が持ったんです。》

「………なんで分ける必要が？」

《……………別れたんです、私たち。娘が繋ぎ止めてくれてたような物でしたから。》

いけねえ…少し踏み込み過ぎた…

「あの、すみません。踏み込んだ事をお聞きして……」

《いえ、主人、今日ひったくられた時、自転車に乗ってたんです、ひったくり犯はバイクで……》

バイク……手口がちがうな……

《それで取られた時に転んでしまって気絶してしまったみたいで……》

なるほど、村上の野郎見た感じで女の子だ、って決めて…綾野だと決めつけたわけで…確認せずに……

「旦那さん、意識は？」

《……ええ、今はもう大丈夫みたいで、でも一応検査入院って事で、まだ病院です。》

「わかりました……どちらの病院でしょうか？」

《……え…いえ、携帯は私が受け取りに行きますから、今どちらに……？》

「東京の、D市ですが…」

《……………すみません、私、今栃木にいます。》

「……………あの、病院は？」

《……………ハイ》

時刻はpm8…00

都内にある大きな病院に俺は来ていた。

「面会ギリギリ許してくれたな……………」

ここにくるまで、いくら都内でも、電車で20分かかった。

片道で160円……………キツイなー

そして病室に着いた

中は6人分のベッドがあり、うち4人分は使用中だ

旦那さんの名前は……………田村…さん…だったな……………

窓に一番近いベッドにその人はいた。

退屈そうに本を読んでいる……

「あのー…田村さんですか？」

「えっ、はい……」

年は30ぐらいか…大人っぽい雰囲気がある

「あのアナタは……？」

田村さんにとっちゃ俺は完全に他人だもんな……

「俺は三河と言います……あの、何と言うか、今日…田村さんひったくりにあいましたよね？」

「……警察ですか……？」

「そうみえますか？」

「いやいや……、若すぎる」

良かった…見えるって言われたら、俺も相当老け顔って事だからな
……

「ハイ、俺は警察じゃ、ありません。ただ、警察の人に頼まれて、
まあ……それがぐるぐる回って、ここに来たわけです。」

「…何か色々大変でしたね。」

……………この人優しいな……………

「…ええ、160円片道でかかりました……………」

「……………お支払します。」

「すみません…」

俺は頭を下げた

「所で……………あなたはどうしてここに？」

田村さんは当然、俺が会いにきた理由なんてわかるわけねえな……………

「田村さんにコレを届けようと思って……………」

携帯をポケットから出す……………

「……………コレは……………」

「警察の方（村上）がどうやら間違えて……………俺が預かる事になって……………」

「……………そうか……………私はあのバックにいれてたんだな……………この携帯は私の娘のなんだよ……………」

「……………聞きました、その携帯の履歴から家というのにかけて、奥さんがでまして……………」

「そうか……」

〈形見分け〉…ね……

繋がりを無くしたから別れたっつーのに、なんでその繋がりを完全に断たないのかね……

切るなら切るでスパツといきやあいいのに……

「まあ、アレだ、忘れたくないからね。」

田村さんは苦笑いしていた

なんか、その笑顔が羨ましいような、むかつくような……

なんだろうな……

モヤモヤする………

「あっ…これは往復代金とせめてものお礼ね………」

ご、5000円も貰ったー！！！！！！！！

やりました！！

「情けは人のためならず……」の通りだったぜ！！

これだけありゃあ……松屋に寄れる！！

「ありがとうございます。こんなにいただいてすみません……」

「いや、いいいいよ。」

本当にいい人だこの人ー

「おっと、もう9時だね、もう面会は終わりだね……」

「あ…じゃあ俺はこれで失礼しますね。」

「ああ…ありがとうね、今日は。」

「いえ、なんでも無いです。」

田村さんと別れ病院を出る

3月の終わりといっても、まだ夜は冷えるな………
うん、さっさと帰ろう。松屋は延期だ…

電車に乗ってはや20分……地元に着いた

時間は9…30

晩飯に遅刻だな……

家に着いたのは10時…

晩飯食って、風呂に入って

今……気付いたら、俺のバックには、レンタルビデオ………

あ

延滞だわ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6737b/>

羽ばたくのは

2010年10月11日16時16分発行